

昭和39年朝鮮戦争の傷跡の癒えない韓国では、日韓条約批准猛反対の極めて危険なデモが、韓国内で荒れて居りました。その最中に韓国から貝類の埋蔵量の調査、採取方法、加工技術を日韓親善使節団として指導して欲しいと招かれました。

仁川、木浦、麗水、釜山の広大な海岸線を歩き、干満差10メートル余りか？との凄さに驚かされながら弟と1カ月を過ごして参りました。

当時の韓国は、貧困を極めておりましたので、私達への期待は大きく、毎夜、市長主催の歓迎宴と不衛生な水と下痢に悩まされて、「生きて日本に帰れるだろうか」と言う不安も大でした。この親善訪問は、帰国と同時に東京湾内のハマグリ、アサリが全滅しましたが、韓国から輸入の橋渡しのきっかけを作りました。それからまもなく私は貝類問屋をやめて、現在の学校給食業に転業、給食用の冷凍丸みかんを熊本農協から毎年百万個位買い付けておりました。その衣笠のホテルで偶然釜山の趙さんと出会い、帰りの飛行機内で韓国婦人会長朴京徳さんと同席し、韓国の宮城まり子と言われた巨済島の金愛光園長ともめぐり合い、金さんは「マグサイ賞」を受賞され、私も妻と巨済島までお祝いに参り、給食物資を何年か送り続けました。

この頃韓国にとって、東京はまだまだ遠く、伝手も無い時代でしたから、この方達は関東、東北への視察、京都見物はすべて私がお金を負担して、妻が案内役となり、10日間滞在留されて「こんなに親切にされたことは韓国では内緒です」と土産も持たずに帰りました。それほど反日感情が一般市民に強かったからであります。

それから数年後、趙さんは釜山の要人となってお世話になった御礼にと交換学生を釜山に招待して下さい、私も何度か同行致し、また韓国からも来日してくれる国際交流の始まりとなりました。韓国の高校生たちが1週間の日程を終えて帰られる時、「私達が学んだ日本とは全く違って、とても親切で、優しく、素晴らしい国でしたので私は帰りたくないです」と泣いてくれました。

日本の高校生達もまた、「韓国旗が掲げられ、国家が流れる時、彼らは毅然として直立不動の姿勢をとり、国や他人の為に犠牲になった人には英雄として賞賛するすばらしい国だ」と感銘してくれる。国際交流の素晴らしさがありました。

今君津市には外国の方達が凡そ7百名居られます。国際交流委員会の谷委員長が中心となって、日本の良さをもっと良く知ってもらい、国際的な親善交流を深めたいと毎年交流パーティーを開いて、今年で6年目を迎えました。今年も24名の外国の方達と会員9名、パーティーは楽しいゲームに始まり、にぎやかに心を開いてくれた良きパーティーとなりました。来年は会議所創立20周年を迎えます。女性会、青年部にも呼びかけて、揃いの浴衣で日本の踊りを覚えてもらい、市民祭り等に参加して下さいれば君津のイメージも変わるかもと願っております。先日お会いしたスリランカのニシャンタさんは国際交流から国際結婚が生まれ、互いの文化を知り理解を深めて壁をなくすことが世界の平和発展につながるのです・・・と、空手4段師範羽衣大学準教授は日本人より日本人らしい黒の羽織袴の好青年でありました。

